

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
大学院学生研究
2017年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	ドイツ文学	専攻		
研究代表者 (2018年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科・ドイツ文学専攻 博士課程後期課程1年		齋藤 萌 印				
指導教員	所属・職名		氏名				
	文学部・教授		前田 良三 印				
自然・人文・社会の別	自然	・ <input checked="" type="checkbox"/> 人文	・ 社会	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
研究課題	世紀転換期スウェーデン美術におけるナショナル・イメージ構築の理論と実践 — ドイツ民族主義思想との関連から						
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2018年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科ドイツ文学専攻 博士課程後期課程1年		齋藤 萌				
研究期間	2017		年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円						

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等使用しないこと)

本研究の主題は、1900年前後のスウェーデンの画家及び芸術批評家によるナショナル・アイデンティティ構築の問題を、ドイツの民族主義的思想家ユリウス・ラングベーン受容の観点から論及することである。2017年度はこの問題にスウェーデン画家の絵画的実践とラングベーンの民族主義的思想の両側面からアプローチするため、以下の二点を中心に研究を遂行した：

- 1) 画家カール・ラーションの水彩画集『私の家』(ett hem) を「スウェーデン」アイデンティティ構築のための実践として位置付けた上で、テキストの分析を行った。その結果として、ラーションの民族主義的側面を指摘した。
- 2) ラングベーンの著作『教育者としてのレンブラント』(1890) を、'Individualismus'概念に着目して分析し、その思想の根底には、「民族」(Volk) を「時代」との関わりにおいて生成的に変化するものとして捉える民族観があることを論及した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)

{ 世紀転換期 } { 民族主義 } { J. ラングベーン }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと)

本研究は当初、2017年度に水彩画集を中心としたC. ラーション作品および付随テキストの分析を行うことを予定していたが、指導教授とも相談の上、研究全体の構想を再検討し、研究の主題を変更することとした。変更後の研究主題は、J. ラングベーン『教育者のレンブラント』の受容を表象の観点から論証することである。具体的には、以下の三点を中心に研究を遂行する。第一に、同書の内在的分析を行うことにより同書における民族主義的思想、芸術観及び両者の関係を「個体主義」等の諸観点から明らかにする。第二に、同書における具象的な表象形式と、ナザレ派や象徴主義といった、この表象形式に関連性の高い形式を有すると考えられる、19世紀から20世紀にかけての絵画作品との比較検討を行う。第三に、『教育者としてのレンブラント』が刊行されるに至るまで、17世紀ネーデルランドの画家レンブラントには、ドイツのナショナル・アイデンティティ生成の文脈においていかなる位置付けが与えられてきたかという点を、ゲーテやロマン派の芸術論等に注目して検証する。本研究で当初予定していたスウェーデンでのナショナル・アイデンティティ構築の問題は、ドイツ(人)にとっての自己同一化の対象としての「北方」ないし「北方性」について論究する際に論じる予定である。

研究全体構想の変更に伴い、2017年度は、レーションの作品分析を水彩画集『私の家』に限定し、更に、次年度以降に遂行予定であったラングベーンの民族主義的思想の分析を前倒して行った。以下に本年度の研究成果の概要を、

- 1) C. ラーションの画集『私の家』(ett hem) の分析 — ラーションにおける民族主義的要素
- 2) J. ラングベーン『教育者としてのレンブラント』における、Individualismus'

の二点に分けて報告する。

1) C. ラーションの画集『私の家』(ett hem) の分析 — ラーションにおける民族主義的要素

本研究では2017年度上半期に、カール・レーション(Carl Larsson, 1853-1919)の水彩画集『私の家』(ett hem, 1899)のテキストを「スウェーデン」アイデンティティ構築の観点から分析することにより、一般的にスウェーデンの明るい家庭生活を描いた水彩画集として知られるこの作品にも、ナショナリズムの要素が認められることを指摘した。

カール・レーションは、1880年代から20世紀初頭にかけて活躍したスウェーデンを代表する画家の一人である。レーションが手がけた作品ジャンルは幅広く、記念碑的絵画、肖像画、文学作品や新聞等の挿絵などと多岐にわたる。しかし、その名はとりわけ、『私の家』をはじめとする、ダーラナ地方での自身の日常生活や家庭生活、近隣の人々を描いた一連の水彩画集により、今日に至るまでスウェーデン国内外で知られている。

『私の家』は表題が示す通り、レーションが自身の家庭生活に題材を求めた作品であり、主にレーションの水彩画の複製24枚とレーション自身が書き下ろしたテキストから構成される。この水彩画集は比較的低価格で販売されたことや、親しみやすい画題と画風のため、商業的にも成功を収めた。また、この水彩画週によって「明るい家庭の父親」というレーションのイメージが形成、定着したと考えられる。

レーションの画風を同時代のスウェーデンのそれと比較した場合、水彩画での表現を基軸とした明るい色彩と輪郭線の強調、画題を頻繁に日常生活に求めていること、ジャポニズムへの傾倒等の点から、レーションは「急進的」な傾向をもつ画家であったとされる。その傍証としては彼が同時代のスウェーデンで起こった反アカデミー運動においても中心的役割を演じたことが挙げられる。しかし、政治的には、レーションはナショナリスティックな保守的傾向を有し、例えば、国防強化を求めて三万人に及ぶ富農が王宮への行進を行った1914年の「農民行進」に共感を寄せ、このためのパンフレット作成にも協力している。更に、レーションの保守的側面の反映は『冬至の生贄』(1915)等のいくつかの絵画作品においても認めることが出来る。

本研究では仮定的に、『私の家』をレーションによる「スウェーデン」アイデンティティ構築のための実践と位置づけ、この観点から同書に付されたテキストを分析した。以下にこの分析結果を三点にまとめて示す。①『私の家』は明確に、「スウェーデン人」読者を対象に執筆されている。②『私の家』出版の目的はインテリア装飾の手本を示すこと明記されているものの、レーションの主たる関心は「理想の」家庭のあり方を示すことにあると考えられる。その理由は、同書ではインテリア装飾の手本を示す以

研究成果の概要 つづき

上のこと、即ちそのための具体的な手法が記されていないこと、更に、水彩画集で言及されるのが、単なる建物としての「家」(hus)ではなく、「家庭」(hem)であること、この二点に求められる。③加えて、ラーションの狙いは「家庭」や日常生活を単に美的かつ快適なものにすること以上に、これらの領域を「スウェーデン人」に適した一定の指針に基づいて美的に刷新することにより、産業化や都市化といった近代化の影響により失われつつあるとされるスウェーデン人としてのアイデンティティを回復させることにあった。ラーションによれば、スウェーデン人としてのアイデンティティとは、洗練されておらず、「質素」(enkel)かつ「不器用」(klumpig)であるものの、「威厳」(värdig)を備えていること、と定義される。

2) J. ラングベーン『教育者としてのレンブラント』における,Individualismus'

2017年度下半期には、ユリウス・ラングベーン (Julius August Langbehn, 1851-1907) の著書『教育者としてのレンブラント』(Rembrandt als Erzieher, 1890) の内在的分析を同書における鍵概念の一つである,Individualismus' に着目して行った。

ラングベーンは主として、P. ラガルドら他の民族主義的思想家の著作と共にナチズムおよびホロコーストへと至るドイツ民族主義的思想の源泉のひとつとされる『教育者としてのレンブラント』の著者として知られている。(Vgl. F. Stern, 1961; G. Mosse, 1964; L. Poliakov, 1971) 『教育者としてのレンブラント』は、刊行直後から多くの読者を獲得し、1890年から1893年までに43版を重ねた。20世紀に入った後も、同書はワンダーフォーゲル運動等を介してドイツの様々な社会階層に受容されていた。しかし、従来の研究では、主として歴史学の領域で、『教育者としてのレンブラント』とナチズムとの思想的繋がりが過度に強調されてきた。このような先行研究の見方に対し、本研究は、『教育者としてのレンブラント』が刊行当時持ち得た思想的・文化史的意義を明らかにすることを目的としており、そのためにも、同書の内在的分析を行い、同書で用いられる諸概念を再検討することが必要と考える。

この研究目的を達成するための第一段階として、同書第一章「ドイツの芸術」(,Deutsche Kunst')に着目し、同書の鍵概念の一つである,Individualismus' の意味を究明した。分析によって得られた結論は、以下の三点にまとめられる。

①『教育者としてのレンブラント』における,Individualismus' 概念は、「ドイツ民族」の本質的性質を成す。この概念の意味するところは、「民族」を構成する「個体」(Individuum)がそれぞれに「性格」(Charakter)という全体性をもつことである。同書で用いられる,Individualismus' は従って、今日一般的に「個人主義」として訳される,Individualismus' とは意味を異にしており、本研究では「個体主義」と訳す。②「個体主義」は離散的な傾向を持つ。この性質がドイツの政治的不統一といった社会的・政治的現象の要因であり、同時に「ドイツ民族」の内的多様性を担保しているとされる。③「ドイツ民族」に本質的な「個体主義」は「統一」に逆行する性質であるが、「民族」(Volk)という枠組みが、「個体」を相互に関連させ、「統一」体たることを可能とする。

また、以上の「個体主義」概念の前提として、④ラングベーンにおいては、「民族」とは、歴史の時間的流れにおいて相互に区分される各「時代」(Zeitalter)と相互に規定し合い、そのために持続的な生成の過程にあるものと理解されることが明らかとなった。

2017年度は更に、ラングベーン及びラングベーンの生涯の後半を経済的に支えていた画家ニッセンによる著作、『教育者としてのレンブラント』刊行を受けて出版された関連書籍等の一次文献の収集を行った。資料収集は今後も継続して行われるが、これらの資料を精査することにより、ラングベーンのレンブラント受容の契機となった資料を明らかにし、また彼の芸術観や、レンブラントをドイツ表象と結びつけに至る経緯を論証する上で重要となるゲーテ受容、ロマン派受容の文献学的考証が可能となる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多し場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

- ・ 齋藤萌 (紀要・査読なし)
表題:「研究ノート J. ラングバーク『教育者としてのレンブラント』における,Individualismus」立教大学大学院ドイツ文学専攻論文集『WORT』, 東洋出版, 第39号, 2018年, 39-53頁。

② 図書

該当なし。

③ シンポジウム・公開講演会等の開催

該当なし。

④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ・ 齋藤萌 個人口頭発表, 使用言語: 日本語 (査読なし)
表題:「世紀転換期スウェーデン美術におけるナショナル・イメージ構築 — ドイツ民族主義思想との関連から」, 第5回宗教思想研究基礎概念研究会 (「神秘主義」概念研究会), 於立教大学池袋キャンパス, 2017年7月。
- ・ SAITO, Megumi 個人口頭発表, 使用言語: ドイツ語 (査読あり)
表題: „Ein schwedischer Nationalmaler Carl Larsson. Eine medienhistorische Analyse von seinem *ett hem*“, „(Un-)Gleichzeitigkeit“, „International Promovieren in Wuppertal (IPIW)“, Wuppertal, Germany, September 2017.